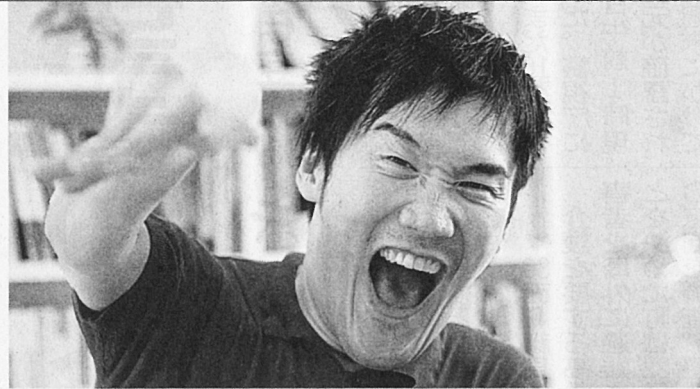


ひと

重度障害を乗り越え、博士論文に挑んでいる

てんばた だいすけ
天島 大輔 さん(31)



生きているこの瞬間、瞬間が挑戦であり、闘いだ。14歳のとき急性糖尿病で心肺停止状態になったのが原因で、自分では動くことも言葉を発することもできない。色や立体はある程度わかるが、文字は読めない。時々あごがはずれ、放っておくと窒息する。生きるためには24時間の介助が必要だ。意思は通訳者を介して伝える。

「あ・か・さ・た・な……」と順に発音してもらい、腕などをわずかに動かして合図を送る。行が決まったら、さらに「さ・し・す……」と発音してもらって「反応、1文字1文字を紡ぎ出す」。

養護学校を出た後、猛勉強する一方で入試時間の延長などを交渉し、2年がかりでルーテル学院大(東京都)に合格。ノート取りや食事など友人らの助けを借りて通学、卒業した。2010年から立命館大学院(京都市)で障害者のコミュニケーション法について研究する。授業は主にインターネット電話で受け、大学院生ら6人が文献調べや国内外でのインタビュー調査、論文執筆を支援する。

この夏、熊本で講演した。会場で発表に必要なパソコンを飛行機に忘れたことに気づいた。真っ青になる介助者に「泣くなよ」と伝え、大笑いした。困難も楽しんでしまう余裕とユーモアが周囲を魅了する。その後落ち着いた介助者がメモリーを持っていたことを思い出し、講演はことなきを得た。

文・大久保真紀 写真・河合博司

掲載日 2013年10月23日 朝日新聞朝刊

©朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。